

Title	静脩 Vol. 39 No. 2 (2002.8) [全文]
Author(s)	
Citation	静脩 (2002), 39(2)
Issue Date	2002-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/66043
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



『情報探索入門』2002より

薬学研究科 金子周司

『京都大学に在籍する1名の教官について、主な研究テーマ、所属学会、学位論文、受賞歴、科研費の取得状況、最近の学会発表、最近の著作や論文、代表的な論文の被引用状況と当該論文掲載誌のインパクトファクターを調査せよ』

あたかも自己点検評価のような上記の調査は、附属図書館提供の全学共通科目『情報探索入門』のある1コマにおいて、学部2回生以上からなる受講生に課している演習課題である。受講生は思い思いの教官について、メディアセンター端末から国立情報学研究所NACSIS-IR、米国ISI社Web of Science、あるいはインターネット上に点在するWebページを渡り歩きながら情報を収集し、レポートを作成して電子メールで提出する。

この演習は、あらゆる学術データベースがインターネット技術と融合し、電子図書館の整備が行き届いた京都大学においては、様々な学術情報をインターネットで学内から入手できつつあることを、受講生に体得してもらうことを目的としている。しかし、同時にインターネットが万能の百科事典ではなく、図書館や研究室に



累積する印刷物による情報と相補的な関係にあることに気づいてもらう意図もあり、何人かの学生は演習レポートでその点を鋭く指摘してくる。

『情報探索入門』は電子図書館を含む図書館の諸機能を系統的に学ばせる講義・演習として平成10(1998)年度からスタートした。教授陣として長尾眞総長、佐々木丞平附属図書館長、川崎良孝教育学研究科教授、カールベッカー総合人間学部教授、佐藤理史情報学研究科助教授と筆者の6名に加えて、演習補助者として図書館職員有志15名にもご尽力いただいている。

筆者はこの中でインターネットやデータベース、いわゆる電子図書館について担当してきたが、わずか5年間でインターネットを介して流通する学術情報の量と質は格段の進歩を遂げてきた。本稿では、実際の講義と演習で取り上げている題材から、2002年の現状を紹介したい。

講義

筆者は分子薬理学の研究者であるが、生命科学の最先端では「情報革命」とでも呼ぶべき研究情報の流通に関する変化が起きている。身近な例は電子メールの普及であり、知人との日常的な連絡はもちろん、いまや顔も知らない海外の研究者とメールを介して知り合い、共同研究を行うという話は特に不思議なことではなくなった。

この講義では、生命科学領域でWebを利用した3つの事例を取り上げて紹介した。

1. HighWire Pressプロジェクトに見られる論文審査・公表形態の変化

1995年、米国スタンフォード大学図書館に端を発した電子出版HighWire Pressは、論文の電子出版を強力に推進してきたプロジェクトである。J. Biol. Chem.(JBC)誌の全論文をAdobe社のportable document format(PDF)形式でインターネットに「出版」して以来、多くの学会と出版社

を包含し、現在では医学抄録データベースMEDLINEに収録される4500余の学術誌のうち332誌のオンライン化を果たし、さらに加盟数は増加している。JBC誌は1997年より機関購読契約制度を開始しており、当時、薬学部がJBCの機関購読をわずか年間16万円の追加投資で契約したところ、京大キャンパスの大部分からPDF論文が発行されたその日に読めるようになった。これが現在、数千もの学術誌を研究室に居ながらにして読める電子図書館時代の始まりである。

電子出版は現在、学術誌の電子編集へと進化したつつある。電子編集においてもJBC誌はWebとメールを駆使した優れたプロトコルを採用している。一般的な学術論文の審査過程においては、論文投稿者、編集者、査読者(レフェリー)の間を印刷された原稿やレフェリーコメントが何度も渡り歩く(図1左)。例えば、京大の研究者が米国の学術誌に投稿し、その査読が英国とフランスの研究者に回されて、その間の通信がすべて郵送によるならば、通信に費やされる時間は延べ十週間にも及ぶことになる。JBCの電子投稿・編集システムでは、論文原稿を執筆者がPDF化する(一部のワープロと画像ファイルも認められる)ことによって、Webページへの原稿PDFのアップロードが投稿に取って代わ

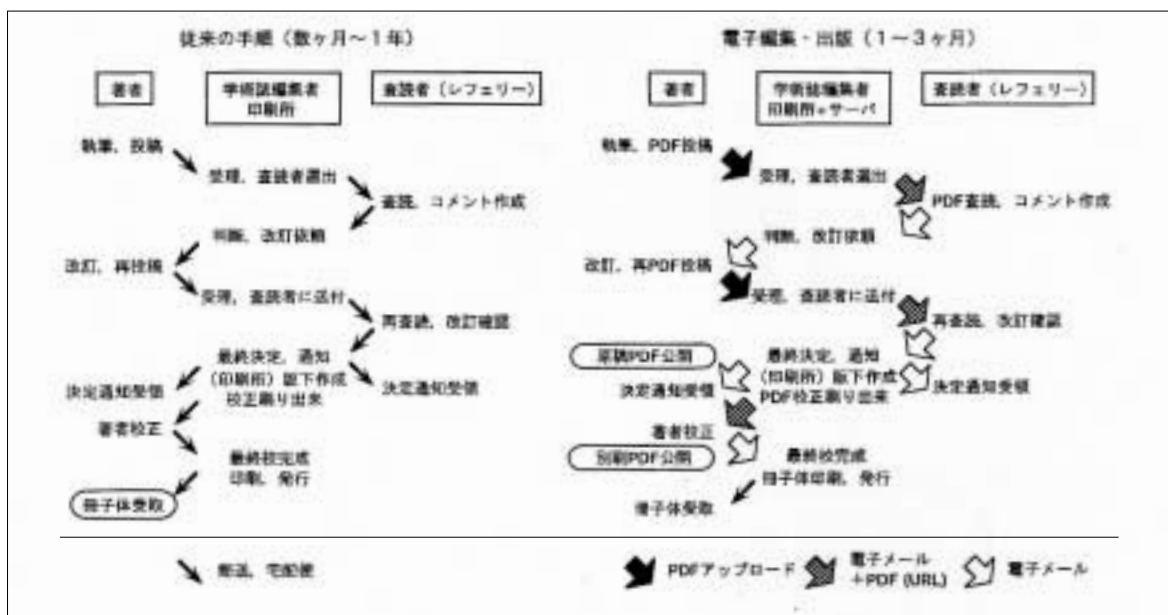


図1 論文投稿から学術誌の発行までの手順 (1回の改訂を要した代表例)

っている(図1右)。執筆者、編集者、査読者間の連絡はすべて電子メールによって行われ、隠されたWebサーバ上に置いた投稿原稿のURLを互いに連絡することによって、インターネット経由で原稿を見ながら審査が進んでゆく。採択が決定されると、ただちに論文原稿はそのままの体裁で仮出版され、公開されると同時に抄録データベースMEDLINEにも収録される。

この方式を採用した結果、JBC誌において最も迅速に審査が行われた場合、投稿からわずか2週間で原稿PDFが公開され、その後、2ヶ月以内に冊子体と同じ体裁の別刷PDFが取得できた。従来、数ヶ月を要した論文審査期間は電子編集によって画期的に短縮されることになったのである。

なお、JBCの場合、電子出版を採用した1995~2001年の間に年間ページ数が58% (約18000ページ)も増加した一方、インパクトファクターは1997年から2001年にかけて最低6.963(1997)から最高7.666(1999)の範囲でほぼ一定を保っている。この論文数の伸びは、同様に発展が著しく、かつインパクトファクターにも大きな変動のない神経科学領域のJ. Neurosci.が同期間に18%、総合領域のProc. Natl. Acad. Sci. USAが23%の伸びである事実と比べても突出している。すなわち、JBCが早期に電子出版、

電子編集へ移行した決断は、高い影響力を量的に示す学術誌としての成功を導いたと言えるだろう。今後は学術誌の生き残りをかけて、このような電子出版・電子編集が国内でも広く普及すると考えられる。

2. Entrez - PubMedに見られる研究データベースの統合化

ヒトゲノム情報に代表される遺伝子情報は原則的に公開されているだけでなく、タンパク質のアミノ酸配列や立体構造の情報、ゲノム上の変異や疾患、さらにはそれらを記載している文献抄録情報と統合的にリンクしたデータベースが形成されている(図2)。

米国でいち早くこれを可能にした背景として、遺伝情報センターNational Center for Biotechnology Information(NCBI)がNIHの医学図書館National Library of Medicine(NLM)の中に設置されている機構形態を指摘したい。すなわち、図書館が本来有している情報収集とデータベース機能が、遺伝子情報を蓄積、運用するにあたって最も優れた場所と見なされ、分子生物学の進展に伴って指数関数的に発生した遺伝子・ゲノム情報がデータベース化されていった。一方、かつてはDIALOGなどの検索ホストなどを通じて有料で使用するものだった医学文献抄録MEDLINEが1998年よりPubMedとして



図2 Entrez - PubMedホームページ (http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/)

無料でWeb公開されることになり、これは遺伝子情報との相互リンクを有するEntrezとして統合された。現在では、先に述べた学術誌の電子出版に対するリンクも設けられており、研究者は、例えばある遺伝病に関連した原著論文の別刷から、その遺伝子・ゲノム情報の詳細までを、すべて机上で調べられるようになった。

このようなインターネット上において無料で使用できる研究資源は、実験による実証を主体とする生命科学の研究手法に大きな影響を与え始めている。すなわち、従来は人間の観察力や経験、限られた情報から立てられた仮説を元にして実験を行っていたが、最近ではコンピュータによって抽象化された一定の規則性に基づく推測が、実験仮説あるいは考察として重要な意味を持つようになってきた。これは例えば、遺伝子断片の配列から抽出される相同性に基づく遺伝子の分類や機能の推定、一定の機能を有するアミノ酸配列（モチーフ）に基づく機能の類推などがあり、バイオインフォマティクス Bioinformaticsと呼ばれている。より将来には、普遍的法則の抽出、細胞や代謝のシミュレーションなどへの発展が期待される分野である。

この例は、情報の蓄積が新しい学問領域を芽生えさせた例としても見なすことができる。図書館も含めた情報学が今世紀の学問に及ぼす影

響力の大きさを予期させる事例である。

3. ライフサイエンス辞書プロジェクトでの研究資源の活用と公開

前2者に比べて極めて些細な例であるが、筆者が関わる電子辞書プロジェクトは一研究者が起こした研究成果の公開例としては当事者も予想外の経緯をたどっている。

事の始まりは1993年、パソコンで専門用語の漢字変換が不十分なことに業を煮やした筆者が、学会や出版社に専門用語集の電子化公開の予定について問い合わせたことにある。結局、生命科学のような学際領域の専門用語は、既存の辞書に頼らずに自作するしかないことがわかり、当時パソコン通信というメディアを通じて全国の有志を募ったところ、全員が異なる大学・学部から成る7名が集まり、科研費の助成を得られたことから辞書制作を始めた。用語はMEDLINE抄録の英文をコンピュータで計量的に解析するという手法で収集し、「多数決の論理」によってよく使われる用語から順番に収録した。当初から電子化して公開することを目的としていたため、少しずつ改良した辞書をパソコン通信で配布していたが、その頃、現在のWeb技術が完成したことから公開媒体をホームページに移行させた（図3）。



図3 ライフサイエンス辞書ホームページ (<http://lsd.pharm.kyoto-u.ac.jp/>)

現在ではオンライン対訳辞書をはじめ、用例、共起表現（ある単語の前後に出現する単語を示すことで頻用される語法が分かる）、音声など、書籍では不可能あるいは収録数に限界のある大量の情報から自由に検索できるページを公開している。また、携帯電話での検索や逐語訳を応用した学習教材の提示システムなど、新しい試みも行っている。

この電子辞書のホームページは、一日2万回以上の辞書検索をKUINS経由で世界中から受けているが、そのサーバは少し性能が良いだけのパソコンである。結局、こういった草の根的な情報発信は、その情報が唯一あるいは独自であれば、インターネット上では検索ロボットでヒットすることになり、価値あるものとして共有されるようである。最近では多くの研究者が自らのホームページを立ち上げて独自に研究情報の発信を行っているが、それが意味あるものかどうかは、専門に関連したキーワードを検索エンジンに入力して評価してみるとよいのだろう。

このオンライン辞書の利用者は、意外なことに、当初、想定していた学生や初学者よりも製薬企業やプロの翻訳者のほうが多いようである。制作者としては辞書を常にアップデートしなくてはならないという使命感を感じているが、この仕事に使える時間との葛藤に陥っているのが実情である。もしこの拙文を読んでくださって興味を持たれた奇々な先生がいらしたら、ぜひWebサイトのオンライン辞書を試みただけ、ご意見やご批判を頂戴できれば幸いである。

演習

『情報探索入門』では講義以上に、演習に力を注いでいる。筆者の担当はインターネット演習とデータベース演習の2回であり、前者では、演習補助者である図書館職員の方々が考案された10種類ほどの課題から、学生が興味をもった2つの課題についてインターネットの検索エン

ジンやディレクトリサービスを駆使して情報収集するというものである。課題は例えば、京都市の年間平均降水量を調べよ、といった簡単なものから、韓国に留学するための制度、手続き、費用を調べよ、という壮大な人生計画を練り上げるものまで多岐にわたっている。時にはこちらも意地悪く、インターネットでは決して正解にたどり着けない課題を出したりするが、実は図書館で教科書を開けば必ず載っている常識だったりしたこともある。そして、もう1回分の演習課題が冒頭に記した人物調査である。

いずれの演習も、あらゆるインターネットあるいはデータベース資源を調べ上げることを要求するが、ネット内の探索を繰り返すうちに、学生はインターネットにはちょっと昔の古い情報が少ないとか、収録されている情報の種類や分野に偏りがあることや、情報の信頼性が疑わしいケースに気づいてくる。つまり、学生は情報の信頼性にまで踏み込んで自分が得た情報を吟味することを体験する。このようにして、結局は電子メディアと従来のメディアを的確に使い分けられる学生を育てたいとの思いが、この演習には込められている。ともあれ、学部の2回生が冒頭に列挙したような事柄を、内容の理解はともかくも、情報としてはほぼ的確に収集できるほどに京都大学のインフラは整備されてきている。

インターネットを介した情報流通が学術研究あるいは大学において中心的なメディアになりつつあることが、現実味を帯びてきた。そんな2002年における『情報探索入門』の一部分を紹介した。

なお、講義で示したPowerPointレジュメ、演習課題およびレポート講評については、2003年5月まで下記で公開している（その後は2003年度の内容に更新）。

<http://www.media.kyoto-u.ac.jp/edu/lec/skaneko/>
(かねこ しゅうじ)

朝鮮の印刷文化

富山大学人文学部教授 藤本幸夫

朝鮮は印刷文化が栄え、特に活字印刷が早くから始まって盛行する等、世界印刷文化史上に於いても輝かしい歴史を有する。朝鮮印刷文化についての紹介はあまり類を見ず、紙幅を与えられたのを機に、簡単に述べてみたい。

一．統一新羅時代（677 - 935）

朝鮮は中国文化を積極的に受容し、それを咀嚼、発展せしめて、東アジアに於いては中国に次ぐ文化国家であった。印刷文化も同様である。印刷文化は文化を構成する一要素に過ぎないとも言い得るが、その比重は甚だ大きい。

さて、本格的木版印刷は、中国で隋あるいは唐初に興ったとされる。その発祥地中国で刊年の確実な最古の木版印刷物は、『金剛般若波羅蜜經』一巻（868）である。従来世界最古の木版印刷物は、日本の『百万塔陀羅尼』（770）とされたが、1966年10月新羅の古都慶州仏国寺の石塔より、木版本『無垢浄光大陀羅尼經』一巻が発見された。同經の印刷は、唐での同經の漢訳（704）以降同寺創建（751）の間にあり、現存世界最古の木版印刷物と推定されている。統一新羅のものとしては、他に写經四巻が伝わるのみである。

二．高麗時代（918 - 1392）

高麗時代は以前同様仏教を尊崇したが、政治理念としては儒教に依拠した。958年には科擧が実施され、仏書のみならず多数の漢籍類も翻刻された。高麗で特に有名なのは大藏經であろう。遼の侵襲を蒙り、その退散を祈願した初雕大藏經（1011 - 87）、大覚国師義天が經典の注釈を集大成した統藏經（1092? - 1101）、蒙古の侵略で初雕大藏經が烏有に帰し、再びその退散を祈念した再雕大藏經（1236 - 51）がある。

再雕本は韓国海印寺に板木を伝えるが、両面に刻字した板木が八万数千枚に及ぶので、俗に「八万大藏經」と称される。高麗時代は大藏經以外に諸寺刹で仏書を出版し、又官やその他で外典（仏書以外）を多数出版している筈であるが、現存は誠に寥々たるものである。

ところで高麗時代に鑄字（金属活字）印刷の行われたことは周知の事実であるが、近年その実態が具体的に明らかになりつつある。活字印刷の濫觴は宋にあり、十一世紀前半に畢昇が膠泥活字（粘土活字?）を作り、鉄版に植字して印刷した。その後元代にかけても膠泥・鉛・木活字が行われているが、中国ではさほど盛行しなかった。

高麗では文献上『詳定礼文』五十巻が、1234 - 41年の間に鑄字で二十八部印刷されたことが判る。又鑄字本を1239年に覆刻した『南明泉和尚頌証道歌』一巻があり、その底本たる鑄字本は十三世紀初頭頃にあると思われる。1972年にフランス国立図書館所蔵の、1377年韓国清州牧外興徳寺刊『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』巻下（闕巻上）一冊が公開され、一躍脚光を浴びたが、これが現存世界最古の鑄字本である。活字の材質は明らかでない。又同書と同一の鑄字本の覆刻書『慈悲道場懺法集解』二巻も発見されている。

三．朝鮮時代（1392 - 1910）

朝鮮時代は約500年続いたが、仏教は尊尚せず、朱子学を治国理念とした。従って仏書は主として寺刹で刊行された。中央政府（ソウル）の官版では、鑄字（銅が中心、他に鉄や鉛）印刷が大部分を占め、刊行部数の多い場合は木版によった。地方の官版は木版が中心で、木活字も用いた。民間も木版が中心で、十八・十九世紀には木活字使用も多かった。

中央の官版で鑄字印刷が中心となるのは、刊行部数が百部前後と少ないためである。百部のうち八十部ほどは、「何時・誰に・何書」を与えるという記録（内賜記）を第一冊前表紙裏に墨書して、臣下に下賜された。これを内賜本と言う。内賜本は主として高官に、医学・天文・数学書のような実用書は、卑官の実務家にも与えられたが、臣下にとってはこの上なき名誉であった。全国的に広布すべき書籍は、地方諸官衙に鑄字本を送付し、それをそのまま覆刻せしめた。中央で校正を厳密にしておけば、全国的に同質のテキストが得られるからである。

鑄字は経済的・技術的問題のために、民間では殆ど作られなかった。官版における鑄字の種類は、三十種以上に上る。朝鮮時代の最初の鑄字は癸未字(1403)で、以降庚子字(1420)・甲寅字(1434)・庚午字(1450)・乙亥字(1455)・甲辰字(1484)・癸丑字(1493)等々があり、多くは鑄造年の干支で呼称される。

朝鮮本は仏書以外は刊記を欠くことが多い。例えあっても干支で記されることが多いため、刊年の特定は困難で、版式や紙質等で推定することになる。鑄字本の場合は鑄字の使用期間が限定されているため、刊年推定はほぼ可能である。木版本の場合は、その板木を刻した刻手の名が版心（板木の中央部）に彫られることがあり、それを手掛かりに刊年・刊地の特定や推定も可能である。

朝鮮の書肆については詳かでない。十六世紀前半に官立書肆設置の建議がなされたが、その結果は明らかでなく、又十九世紀前半には官立書肆が設けられたが、十分に機能を発揮せぬままに廃止された。民間での営利的書肆は、一般的に十八世紀後半以降とされるが、さほど活発ではなかった。書肆未発達最大の要因は、購読者層の寡少にある。全人口中数パーセントの両班（支配層である知識人）や中人（医学・天文・数学等の実務担当者層）が購入層であり、その人々は書籍の入手困難を託っているが、

さりとて彼等を対象に書肆が成立するには少なすぎた。又民間に本格的書肆を立ち上げるに充分な、資本の乏しかったこともある。

結局書籍入手の方法としては、(1)王よりの下賜（内賜本）、(2)板木所在地に紙を送っての印刷依頼、(3)書籍売買斡旋者（例えば下級役人）を通じての購入又は交換、(4)友人間の重複本交換や授受、(5)地方高官である友人よりの地方刊行書の寄贈、(6)中国へ赴く使臣等への中国本購入依頼、(7)自ら或いは他人に依頼しての写本作製、等がある。

これら諸手段の中、最も基本的なものは(2)である。そのためには必要な冊板（板木）の所在地を知ることが肝要であった。両班たちの日常常識書である『攷事撮要』二巻（1554）は、初版以来幾度も改版を重ねて重用されているが、同書中に地方官衙所蔵の冊板が記録されている。又地方ごとに『冊板目録』も編纂され、これらによって冊板所在地を知り得た。これら『冊板目録』は今日に於いては、往時の出版状況を知り得る貴重な資料になっている。

四．日本の朝鮮本受容

日本は古来多くの朝鮮本を受容して来た。538（或いは552）年百濟よりの仏教伝来が、それをさらに促進したに相違ない。仏書等伝来の記録はあるが、鎌倉末以前の齋来書そのものは確認されていない。室町時代には三種の大蔵経が幾度も将来されたが、その一部のみが伝存する。豊臣秀吉の朝鮮侵略（1592・1597）は朝鮮に深甚なる惨禍を齎したが、その際に多量の朝鮮本が掠取将来された。これらは現在東京を中心に各地に散在するが、十六世紀刊本が主で、十五世紀やそれ以前の刊本は少ない。それらの多くは韓国にも伝存するが、殆どは残本である。日本では殆どが完本で保たれ、極めて重要である。江戸時代には対島の宗藩が日朝交渉に与ったが、1683年の同藩「蔵書目録」には、約3200冊の朝鮮本が確認される。また明治から昭和前

期には日本の古書店や学者・好書家等が、多量の朝鮮本を購入し、現在各地に伝存する。

これら朝鮮本は日本で屢々翻刻されたが、特に江戸時代には秀吉時将来本によって多くが翻刻され、日本の学術に及ぼした影響は極めて大きい。又中国で既に失われた書籍で、朝鮮刊本という形で現存するものも少なくない、朝鮮本の研究は、朝鮮学は言うに及ばず、日本学や中国学に資する所甚大である。

五．朝鮮本総合目録の作製

以上の如き経緯で日本には貴重な朝鮮本が多量に現存するが、それらの刊種・刊者・刊年・刊地等は多くの場合未詳で、所蔵所さえ明らかでないものも多い。筆者はこれら朝鮮本を三十年間に亘り調査して来た。現在8 - 9割を看了して、総合目録の作製に着手している。調査項目は28項目に及び、従来になく詳細である。書誌学的観点からの著録で、刊種の特定、刊・印・修の区別、刊者・刊年・刊地の特定や推定、蔵書印、撰者の経歴、出版の経緯等に及ぶ。研究者がある書を求めて諸処を巡らず、直ちに最良のテキストに到れるように配慮している。

六．終わりに

筆者は元来語学の徒で、現在富山大学人文学部で朝鮮語学を担当している。韓国留学より帰国した1970年、日本現存朝鮮語学書発掘の目的で作業を始めたが、その範囲は次第に全分野に広がった。対象資料の9割以上は漢文から成る。調査開始時、筆者は文学部言語学科博士課程の学生であったため十分な旅費もなく、専ら文学部及び本図書館所蔵書を対象とした。

本館に就いて言えば、河合弘民博士旧蔵の河合文庫があり、同文庫全体が貴重書に指定されている。河合文庫は大きく朝鮮本と十九世紀後半の商店文書等から成る。前者には貴重書は少なく、殆どは十八・十九世紀の普通書であるが、後者は朝鮮朝末期の商業の実態を示す貴重な資

料である。

当時は以前の旧図書館で、河合文庫は別棟にあった。現在の博物館あたりにレンガ造り二階建て書庫が、東山通りに平行して一列に長く三棟連なり、その一番奥の二階に別置されていた。工事現場用の手押し一輪車に書籍を載せ、鍵を預かってよく往復したものである。本館書庫内で発見したのは、『歴代兵要』十三巻（闕巻三）存十二冊で、庚午字（1450年鑄造）で印刷されている。この活字は謀反の罪で死を賜った王子、安平大君の揮毫に基いて鑄造され、印刷書としては『古今歴代十八史略』十巻、『古文真宝大全』残本が確認されるのみで、同書が第三種目となった。近年更に『算学啓蒙』三巻が発見された。庚午字は1450 - 55年間使用されたので、上記書はすべてその間の印刷書である。又地下階段の下部空間に、拓本集『金石集帖』216冊が幾山かに積み重ねられていた。コンクリートに接する最下冊は湿気を吸って破損しており、館員の森島さんと箕子板を敷いたのも、懐かしい思い出である。これは十八世紀後半に蒐集された拓本の一大集成で、今日既に失われた碑石も多く、又現存しても風雨で摩滅を蒙り、誠に貴重である。

筆者の朝鮮本調査の原点は本館にあり、多くの館員の方々から御配慮をいただいた。筆者にとって本館は母の懐のような存在である。往年の建物は既になく、又館員諸氏も殆どが去られ、今も時に調査に訪うこともあるが、往時を偲んで転た感慨に堪えないものがある。

近年図書館の地位は、いずれの大学に於いても、全学諸機関中で甚だ低いと聞くが、筆者は図書館こそ大学の中心的存在であると、常々思っている。全国図書館館員諸氏の矜持と奮発を祈って止まないところである。

（ふじもと ゆきお）



『真西山読書記乙集』大学衍義』卷三十七卷首。
1434年甲寅字印本。
全四十三卷中、卷二十三至四十三の十冊を所蔵するが、日本各地に僚巻がある。



『歴代兵要』第一冊首。
1450 - 55年間庚午字印本。全十三巻中、巻三のみを闕く。庚午字印本は四種知られ、該書は天下の孤本。



『東国輿地勝覧』第一冊前表紙裏の内賜記。弘治十五年（1493）二月権鈞への内賜本。一般に内賜記の年を刊年と見做す。



『東国輿地勝覧』巻一巻首。
1493年癸丑字印本。巻一・二の一冊を存するのみであるが、この活字による印本は少ない。



『金石集帖』第一冊前表紙。216冊存するが、内容によって分類されている。



拓本集成『金石集帖』第一冊冊首。十八世紀後半の作製と考えられる。僚巻が韓国に若干存する。一組或いはせいぜい二組の作製であるうが、他所に確認できず、本館蔵書の持つ意義は大きい。

経済学部所蔵『マルクス『資本論』第1巻初版写真版』について Yさんへの手紙から

文学部図書室閲覧掛長 松田 博

1995年11月

Yさんへ

先日は資料閲覧に格段のご配慮をたまわり誠にありがとうございました。また、経済学古典のいくつかを拝見することができましたこと、こころよりお礼申し上げます。

ところで、1974年購入の『資本論第1巻初版』、あるいは1988年購入のボルクハイム・ジーギスムント・ルートヴィヒ宛マルクス自筆献辞入り『資本論第1巻初版』を目にし、興奮のあまり榊田文庫蔵の『資本論』について原本を確認する機会を失ってしまいました。

お話では、1974（昭和49）年3月7日付け登録の『資本論』、これは1983年に東北大学附属図書館で開催された「マルクス没後100年記念展」に他の資料とともに出展されたということでした。展示資料としては例えば、マルクス自身による訂正のある『哲学の貧困』、あるいはパスカルへのマルクス自筆献辞のある『資本論フランス語版』、この「フランス語版」は1925年に欧州から帰国した堀経夫が河上肇に渡欧記念として寄贈したものであり、かつその後河上肇が榊田民蔵に寄贈したものであるとのことでしたが、これらが一堂に展示されたということでした。さらに、1988（昭和63）年2月25日付け登録の『資本論』、これについてもご説明をいただきました。このボルクハイム宛献辞の入った『資本論』に関し興味を覚えましたので、帰洛後少し調べましたことを以下に補足いたします。

マルクスは『資本論』を1867年に公刊した際、何冊かを出版社オットー・マイスナーを通し寄贈しています。そして、それら以外にも自らの献辞を入れ献呈をしております。このマルクス自身の献辞のある『資本論』は、現在ではきわめ

て稀少なものですが、どうしたことが日本には小樽商科大学にリーナー・シェーラー宛のものが、法政大学にはルートヴィヒ・クーゲルマン宛のものが、関西大学にはアウグスト・フィリップス宛のものが、従って東北大学所蔵のものを含めると4部もあり、たいへんな驚きを覚えます。

このようなことを語っていると話はつきません。そこで、本題にかえりまして、たいへん不躰ではありますが以下の点についてご教示ねがえれば幸いと存じます。

まず、ひとつめに『榊田文庫目録』の記述からすると「榊田文庫」に『資本論』がもう1部あることになり、したがって東北大学での所蔵は3部ということになりますが、文字通り3部の所蔵でよいのでしょうか。ふたつめにこの『資本論』は欠落箇所がたいへん多いのですが、このあたりの事情についてわかるところをお教え下さい。また、欠落箇所の補充についてはどのようなになっているのでしょうか。さらに榊田文庫への所蔵に至る経過等についても教えていただければ幸いです。

お忙しい最中、とりとめのないことをお聞きするようで心苦しいのですが、よろしく願いいたします。

1995年12月2日

Yさんへ

昨日、11月29日付けのお手紙を拝受いたしました。お忙しい中ご調査いただき、榊田文庫蔵『資本論』についての十分なるご回答をいただき感謝申し上げます。

榊田文庫蔵本は、紙焼き写真版であること、欠頁がSS.63-186, 192-496, 499-510, 513-526, 528-

550, 746-763と多いこと、また欠頁部分については補充していないこと、『櫛田文庫目録』No.476の記述は「写真版」の注記がない以外は記述どおりであること、櫛田文庫への所蔵経過については不明であること、お手紙は以上のような内容であったかと思えます。

ところで、この「写真版」の元本は、ご承知と思いますが現在では法政大学大原社会問題研究所の所蔵になる『資本論』で、クーゲルマン宛のマルクス自筆献辞入り献呈本です。クーゲルマンその人については、ルートヴィッヒ・クーゲルマンといい、医師であり国際労働者協会の活動家でもありました。この元本はまた『資本論第1巻初版』としては、原装訂を残した大変稀観なもの1冊でもあります。

この元本である『資本論』について少し触れておきますと、

宇佐美誠次郎(1)にもありますように、1921(大正10)年に櫛田民蔵が大原社会問題研究所のために欧州で買い求めたもので、それはハースバハ文庫

の1点として購入されたものです。このもともとクーゲルマンが所蔵していた『資本論』が、法政大学大原社会問題研究所の所蔵に至った経過は次のようであります。1902年1月にクーゲルマンが死去しますが、その後クーゲルマン蔵書の一部が売りに出され、古書店等何らかの経路でハースバハの手に入ったと思われます。そしてそのハースバハ文庫は、1920年4月にハースバハが死去し、その1年後古書店シュトライトンを通して櫛田が手に入れ、大原社会問題研究所の所蔵となり、その後大阪にあった大原

社会問題研究所の閉鎖・改組の後、現在の法政大学大原社会問題研究所の所蔵に至ったというわけです。

「写真版」の櫛田文庫への所蔵経緯についてまだ憶測の域を出ませんが、櫛田は経済学関係の文献の少ない当時であって、特に『資本論』研究の必要性や普及を考える中で写真版の作成を行ったのではないのでしょうか。京都大学経済学部にも同様の写真版があり、1925(大正14)年11月13日受入、登録番号314656となっております。親交の深かった河上肇が当時京都帝大にいたことを合わせ考えると、櫛田が贈ったものなのか、河上が無心したものか、はたまた全く別ルートで入ったものなのか興味がわきます。機会があれば入手に至る事情を調べてみたいとも思っております。



この京大所蔵のものは欠頁がSS.63-186, 192-496, 499-510, 513-526, 528-550, 553-555, 561-566, 578-588, 600-607, 635-741, 746-764となっており、前半は東北大学のものと同じですが、後半かなり欠頁が見受けられます。

これも研究上の関心によるものなのか経費的な面からなのか、ネガの散逸によるのか少し調べてみる必要があるようです。

原典による経済学研究が緒についた1920年代初頭、というよりは「経済学古典原典の流入と日本の経済学確立(?)」というテーマからすると、少し触手をのばしたい衝動にかられます。

1995年12月19日

Yさんへ

先の手紙で、櫛田文庫中の「『資本論』写真

版」と同様のものが京都大学経済学部にも所蔵されていると記しました。早速、京大所蔵のものを受入年月をたよりに、「大内兵衛、大島清編『河上肇より櫛田民蔵への手紙』法政大学出版局（1974年7月）」に目を通しておりましたところ、「大正14年6月5日付書簡」に以下のような内容で大原社会問題研究所蔵『資本論』の借用を願っているものに出くわしました。

“前後いたしました、資本論首章の各版参照版発行の件、研究所の御同意を得ました様子、私にとっては第一に勉強になるのであり、もしそれが多少アトに残る意義ある仕事になり、かねて研究所に対し多年の因縁に酬いる萬一ともなれば、本懐の至りです。早速仕事に着手しやうと思えますから、先づ第一版を拝借したいと思ひます。それが済むなら順次に次の版をとりかへとりかえへて拝借したく存じます。研究所の外に持ち出すことをお許し下さる様子、私にとっては時間の節約上大変に助かります。郵便で送って頂けば結構ですが、其紛失を氣遣はれるなら、そのうち私が拝借に出掛けることにいたします。”

また、その「書簡」に関する注記をたよりに、「カアル・マルクス原著、大原社会問題研究所編『原文対訳資本論初版首章及附録』弘文堂、同人社（1928年8月）」の序文に目を通しましたところ、底本について以下のように触れておりました。

“リプリントの基本として使用されたものは、マルクスが嘗て友人クーゲルマン（第二版の跋文参照）に署名して贈った稀有の珍本で、大原社会問題研究所の所蔵に属するものである。その扉および巻頭におけるマルクスの自著は左の写真版に示すが如くである。因みにいふ、京都帝国大学に蔵するものの扉は、茲に示せるものと相違する。”

1920年代初頭の経済学確立期に、『資本論』の翻訳という仕事を通してその普及をはかるといふ河上、櫛田、小林、長谷部らの奮闘振りと

ともに、河上と櫛田の親交がうかがえるような気がいたしました。

「写真版」はこの折に作成されたのではないかという思いを強くした次第です。

以上、取り急ぎ前回の内容の修正方、お礼まで。

2002年×月×日

Yさんへ

ご無沙汰をいたしておりますが、お元気で活躍のことと存じます。

ところで、以前「『資本論』写真版」についておたずねした件に関し、もっと早くに手紙を書かせていただくべきところそのままになっておりました。今回唐突ながらあらためて筆をとらせていただきました。

かつて杉原四郎先生はそれまでの論攷をまとめられ、『思想家の書誌』日外アソシエーツ（1990年5月）を公刊されました。「思想家」の中心はもちろん経済学者ではありますが、社会学者等も含めこれらの方々の「追悼集」について解題されたものです。該博な先生のお仕事は新しい視点をいつも感じるのですが、このお仕事もまた追悼集を通して故人の思想形成や人間関係を再構築するという新たな提起と展開をなされております。この書で取り上げられた追悼集を参考に、わたし自身も追悼集を集めてきました。

その中の1点に「宮川實編『回想の長谷部文雄』八潮書店（1982年7月）」があります。長谷部文雄は、『資本論』の研究・普及のために一生を捧げた方で、最後は龍谷大学の教壇に立ち後進の育成に当たられた方です。追悼集の中に「『資本論』初版以後とその各国における普及状況」と題する一篇が収録されています。1967年6月2日の立命館大学経済学会総会での講演記録であります、その中にこれまで推測の域を出なかった「写真版」の作成経緯について触れている箇所がありました。

全く迂闊なことで、これに目を通してさえいればお手をわずらわせずに済んだのにと、いまでは反省しております。いずれにしましても、該当の部分を少し長くなりますが、引用して紹介しておきます。

“さて私は、さっき御紹介がありましたように、京都大学の河上肇先生の門下生であります。昭和時代ならば、今年は四十二年だから、昭和何年は何年前だということがわかりますが、私の学生時代は大正なんです。大正九年から十二年まで京都大学にいました。そして大正十三年に同志社に勤めまして、昭和八年までおりました。

その昭和二年頃ですね、今から四十年前、私はまだ学校を出てまもない時代であります。河上先生からこれをやれといわれた仕事が『資本論』初版の第一章なんです。・・・

ところが河上先生は昭和二年から『資本論』の翻訳を始められた。これは宮川實君 名前はご存じでしょう。私の親友で高校時代の同窓なんです。この宮川實君は東大の英法科を卒業した法学士なんです。私が京都で河上先生の弟子であった関係から、どんなに『資本論』が面白い、経済学をやれというわけで、宮川實君を京都へひっぱって来ました。そして河上先生に紹介し、弟子になったわけです。・・・その宮川實君が河上先生の『資本論』の下訳をしまして、河上肇、宮川實共訳ということで岩波文庫から『資本論』の翻訳が出版され始めたその当時のことありますから、河上先生はいま言った大原の『資本論』の仕事を自分でやる暇がない。先生は非常に仕事が緻密で丁寧でありますから、あれもこれもいっしょに、ちゃらんぼらんにやってしまうということができない人ありますので、お前がやれということになり、私がやることになったわけです。

『資本論』の初版本の、これは大原に一冊しかない、ほかにも何冊かあることはわかっていたけれども非常に貴重な書物ですが、これを大

原で写真にとりまして、今ならばコピーか何かで簡単なんです。その当時に普通の、あの写真ですね、ガラスの乾板にとりまして、何枚か複写して、河上先生、大原関係の人々、何人かに分けてた、もらったのか借りたのか知りませんが、その一つを私が借りて原稿がわりにして、これは大事なものですからなるべく汚さないようにして、京都で印刷し、翻訳文をつけました。左側の頁はドイツ語で印刷し、右側の頁には、ちょうど左側にドイツ語で出ている部分の日本語をつけたのです。”

これ以上多くを語る必要はないかと思いません。京都大学経済学部でも静かにその利用をまっていた「写真版」の、その由来が確認できたことに一安堵しております。ただあらためての感想になりますが、1920年代に経済学確立に取り組んだ人たち、とりわけ河上肇や榊田民蔵等の真摯な姿に感動を覚えたことを表明しておきます。

最後に『資本論』について補足しておきますと、現在日本での所蔵は36機関45部、個人所蔵は3氏3部があり、このほかにも個人や機関の所蔵が何部かあると思われませんが、最小に見積もっても48部があることとなります。また、そのうちマルクスの献辞が入ったものは4部で、これは大村泉（2）にみられるように、マルクスが献呈したとされる初版が総計32部であったこと、そのうち現存が確認できるものが11部であるということからすると、極めて驚嘆に値すべき数といえるでしょう。日本のマルクス研究の深さと広さを感じさせる事象でもあると言えますでしょう。

長くなりました。御身ご自愛ください。

- 1：宇佐美誠次郎「大原研究所所蔵の『資本論』初版本とその周辺」（『学問の五〇年』所収 1985年9月 新日本出版社）
- 2：大村 泉「『資本論』第1部初版本の伝承」（『新MEGAと《資本論》の成立』所収 1998年4月 八朔社）

（まつだ ひろし）

理学部中央図書室紹介

理学部等図書掛長 喜多吉一

理学部に中央図書室が設置されたのは昭和56年4月で、設置場所は理学研究科1号館3階の一角でした（発足当時の中央図書室紹介記事が『静情』Vol.18, No.1に掲載）。以後、1号館中央図書室の施設整備が進められましたが、研究室等施設の転用のため図書室各室が4箇所に分散する配置となり管理運用の非効率と施設有効利用の困難をもたらし、図書室の狭隘化の解消並びに新たな図書室機能の展開のうえで障害となっていました。



このたび、講義室、共同実験室・実習室、情報演習室、演習室などの教育用施設を集中した理学研究科6号館が本年3月竣工し、中央図書室は1号館から6号館1階・地階西側部分に移

転、4月8日にオープンしました。新図書室は1階と地階にまたがっており、書架への接架形式は雑誌書庫も含めて完全開架制となっています。



1階部分は主に学生用図書資料の利用のスペースで、開架閲覧室と自由閲覧室があり、パーティション（簡易壁）によって間仕切られています。開架閲覧室には参考図書、一般図書、新着雑誌、利用者用検索端末、ブラウジングの各コーナーが配置されており、自由閲覧室は図書室資料を利用しない学生が自由に利用できる自習室として主に利用されています。



地階部分は主に共同利用の学術雑誌利用のスペースで、雑誌書庫と視聴覚室を配置しています。

自由閲覧室及び雑誌書庫は、図書室開室時間外にそれぞれ個別運用することが可能な施設構造となっています。ただ、諸事情によって、図書室施設に拡張の可能性を確保できなかったことと、地階部分の図書室施設が中央図書室雑誌書庫と理学研究科・理学部保存書庫等に分散したことは残念なことでした。

中央図書室は理学部の学習図書室としての機能にウェイトが置かれており、理学部学生の学習に活用される図書資料を主に収集しています。理学全分野の学生用図書資料を利用者に対し効果的に提供することは、学部教育での4年一貫教育において、理学部の教育理念「理学部における専門分野は個別的なものでなく、互いに密接な関連を持っているものである。学生が自ら自己に最も適当と思われる分野を見出し、それに関連する諸分野を含めて重点的に学習し、年次とともにその専門化の程度を進め、最終的には一つの専門分野についての研究にも触れるまでに到達する」に沿うことになると理解しています。

最後に、理学研究科・理学部図書室組織について、各専門分野の研究図書室機能を持つ各教室・施設図書室と、主に学習図書室機能を持つ中央図書室とで構成する分散型システムを取っており、研究・教育への支援機能を果たしています。

（きた よしかず）

片田文庫の音盤資料 (CD・LP)

数理解析研究所図書掛 秋本好治



片田文庫は平成12年に本学に寄贈され、単行本(全集物)については既に関連室に配架されています。今回、当文庫のもう一つの柱である音盤資料について述べてみます。

一個人の蒐集としては膨大な数でCD 4,870種、LP約20,000枚から成ります。

おおよそクラシック9割、あと民族音楽、ポピュラー音楽、流行歌が占めています。

クラシックについては基本的なものはほぼ揃っていると言えます。

そのすべては到底紹介しきれませんがいくつかを紹介します。

カラヤンの芸術 上・下巻(LP)

カラヤンがフィルハーモニア管弦楽団を振った1950年代の録音集。後の磨きぬかれた表現ではなく若き日の推進力にあふれた演奏が聴かれます。その多くは後にベルリン・フィルと再録音していますがバラキレフの交響曲などこれ一度きりのものもあります。

ラフマニノフ大全集(LP)、ハイフェッツ大全集(CD)、グリユミオー・エディション(CD)

個人全集。作曲家として有名なセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は自作のピアノ協奏曲で圧倒的な演奏を遺しています。ヤッシャ・ハイフェッツ(1901-1987)は完璧な技巧で一世を風靡したヴァイオリニストです。1917年から1972

年までほぼすべての録音を網羅しています。アルテュール・グリユミオー(1921-1986)はフランコ・ベルギー派のヴァイオリニストでクララ・ハスキルとのデュオは欧州楽壇の名物でした。バロックから近代までその美音が堪能できます。

ブダペスト弦楽四重奏団の芸術(LP)

1950-60年代2度にわたってベートーヴェンの弦楽四重奏曲全集を録音し、近代的アンサンブルの先駆けとして活躍した当四重奏団の初期録音。1918年結成時のリーダー、エミール・ハウザー在籍時の「大フーガ」が聴けます。荒削りですがその熱演に圧倒されます。

ヴォックス・ピアノ・コレクション(LP)

アメリカの中堅レーベルVOXが1960年代に製作した作曲家別ピアノ曲全集。中でもワルター・クリーンによるモーツァルトはお勧めです。他にメンデルスゾーン、ブラームス、サン＝サーンス、グリーグ、グラナドス、プロコフィエフ、ニールセン等。

コンドン・コレクション 世紀の名ピアニストたち(CD)

1900年代から1930年代までのピアノ・ロール。録音がまだ実用的水準になかった時代にコルトー、ルーピンシュタイン、ホロヴィッツといった名ピアニストの若き日の演奏やドビュッシー、サン＝サーンス、マーラーなど大作曲家の記録が遺されました。

ピアノ伴奏歌曲の様式の変遷1850-1950(LP)

シューマン以降のドイツ歌曲をまとめたもの。20世紀を代表するバリトン、フィッシャー＝ディースカウならではの企画物です。

オリジナル盤による 明治・大正・昭和 日本流行歌の歩み(日本コロムビア)(LP)

オリジナル原盤による日本の流行歌史

戦前篇(日本ピクチャー)(LP)

国産の初期レコード。特にコロムビアは明治

40年から昭和20年までを対象としています。明治大正期は民謡、俗曲等を含みます。納所文子(1896-1964)「鉄道唱歌」、松井須磨子(1886-1919)「ゴンドラの唄」、鳥取春陽(1900-1932)「船頭小唄」、佐藤千夜子(1897-1968)「東京行進曲」、二村定一(1900-1948)「君恋し」「笑ひ葉」、藤本二三吉(1897-1976)「祇園小唄」、平井英子(1918-)「タバコやの娘」「茶目子の一日」が見当たらないのが惜しい)等々。なおこ

れ以前の日本の商業録音は出張録音といい、外国の会社により雅楽、能、長唄、常磐津、義太夫、落語といった諸芸能が記録・制作されました。

この他にも所謂名盤や資料的価値のあるものが色々あります。附属図書館では第2 - 4週の木曜日午後に3階AVホールにて片田文庫のCDによるコンサートを行っています。順次とりあげていますので興味のある方はお越しください。

(あきもと こうじ)

利用者の声

京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻博士後期課程2年 中嶋謙昌

私は、国文学という書物を扱う分野を専攻している関係もあって、附属図書館をよく利用させて頂いている。附属図書館の蔵書は質量ともに優れ、国内屈指の大学図書館であることは疑いない。ただ日常利用していると、言葉は悪いが、「荒れた」雰囲気を感じることもある。

例えば、館内には飲食物が持ち込まれ、ペットボトルや菓子の包装紙などが散らばっている。もちろん、飲食物の持ち込みを禁じた掲示は出ているのだが、その掲示の効果はほとんど見られない。この状況は数年前から比べると悪化の一途をたどっている。そこからは、みんなが持ち込んでいるから構わないだろう、という意識が垣間見える。

確かに、試験準備や一般の学習を目的とした利用者も多く、気分転換に飲食物を摂取したい気持ちもわからないことはないが、それを許せば、図書を汚損する可能性は高くなる。貴重書のように、別室で閲覧することになっている資料ならば、問題はそれほど大きくないが、貴重書に指定されていない蔵書の閲覧は、一般の閲覧機で行われることになる。これらの資料の中には学術上重要なものも数多く含まれているが、それにもかかわらず、このような資料が閲

覧されている隣りで、ジュースを飲む利用者がいるという光景は、附属図書館では珍しくない。それほどまでに気軽に資料が閲覧できるという利便性は、附属図書館の長所でもあるが、やはりこれは行き過ぎであろう。

もちろんこれは利用者のモラルの問題でもある。しかし、近年はそのような常識さえ知らない利用者も数多いようで、注意をされても「知らなかった」と答えるケースがあるように聞く。このような中、利用者のモラルに任せておくだけで、蔵書を守ることができるのだろうか。附属図書館は利用者のモラルが向上するように、もう少し教育的配慮を行うべきであろう。重要な資料が数多く所蔵されている附属図書館だからこそ、その配慮が一層必要とされるはずだ。

モラルの面でもう一点言えば、館内での携帯電話の利用が目には余る。特に館内中央の階段部分で隠れて通話をする利用者が跡を絶たない。善意の利用者が迷惑を蒙っているにもかかわらず、職員から目の届きにくい場所であるせいか、注意されることはそれほど多くないようである。この点についても、重ねて対策を促したい。

(なかじま けんすけ)

附属図書館利用統計（平成13年度）

利用対象者数

1. 学内教職員・学生数 29,428人
(平成14年5月1日現在)
2. 登録者総数 32,991人
(平成14年5月1日現在)
3. 利用証発行枚数(平成13年度) 9,015枚

内訳(2 登録者総数)

教官	4,077人	職員	2,968人
院生	8,246人	その他	4,133人
学生	13,567人		

その他には、卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生、放送大学生等を含む。

新規交付	7,053枚	(うち放送大学生は300枚)
再交付	1,962枚	

(再交付とは、紛失・有効期限切れ・転部・改姓等をいう)

入館利用状況

1. 年間入館者総数 733,740人

内訳

学内	入館機	724,363
	マニュアル*	3,440
学外	閲覧**	5,119
	見学	818 (人)

*マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者

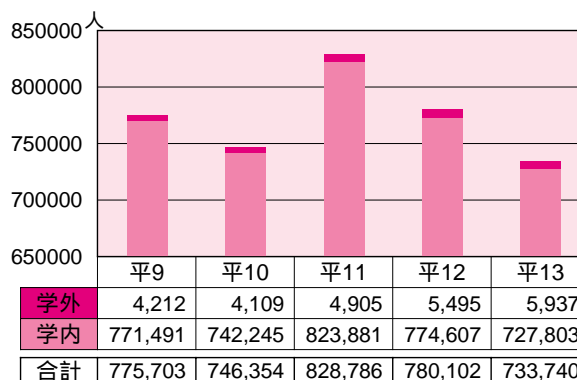
**閲覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者と共通閲覧証による入館者

入館機による入館者 724,363人について

開館日1日当たり	2,391
平日1日当たり	2,930
土・日曜日1日当たり	860
1日の最多入館者数*	4,994 (人)

*平成14年1月22日

2. 入館者総数5年間推移



資料利用状況

1. 普通図書貸出利用状況

年間利用冊数	126,001冊
年間利用人数	67,070人

2. 学内者への貸出

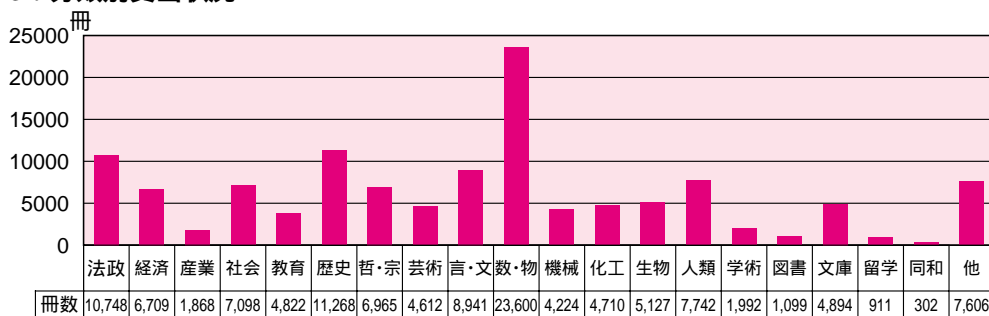
	平成13年度	平成12年度
年間貸出冊数	125,238冊	121,804冊
年間貸出人数	66,750人	65,871人
1日平均貸出冊数	413冊	399冊
1人当たり貸出冊数	1.9冊	1.8冊
年間貸出冊数最高日	2月12日(1,097冊)	12月22日(1,181冊)

4. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1. 富士川文庫	254冊
2. 河合文庫	248冊
3. 和貴重書	184冊
4. 清家文庫	91冊
5. 菊亭文庫	88冊

3. 分類別貸出状況



参考業務

文献調査 国内

1. 受付件数		平成13年度(件)	平成12年度(件)
内容	所蔵調査	6,323	5,900
	事項調査	451	398
	その他	4,308	4,033
	合計	11,082	10,331
形式	FAX(文書を含む)	2,628	2,376
	電話	2,760	2,760
	カウンター	5,694	5,195
	合計	11,082	10,331

2. 依頼件数		平成13年度(件)	平成12年度(件)
内容	所蔵調査	251	295
	事項調査	25	20
	合計	276	315
形式	FAX(文書を含む)	276	315

3. 機関別受付・依頼件数(ただしFAX・文書に限る)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	42	0
国立大学	250	95
公立大学	113	11
私立大学	1,030	114
国立共同利用期間	18	4
公共図書館等	41	11
非営利団体	7	15
一般企業	27	0
個人	103	0
国立国会図書館	3	26
合計	1,634	276

4. 学内者・学外者別利用件数

学内者	5,825
学外者	5,257
合計	11,082 (件)

文献調査 国外

受付件数	平成13年度	平成12年度
	13件	23件
	10機関	21機関

相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

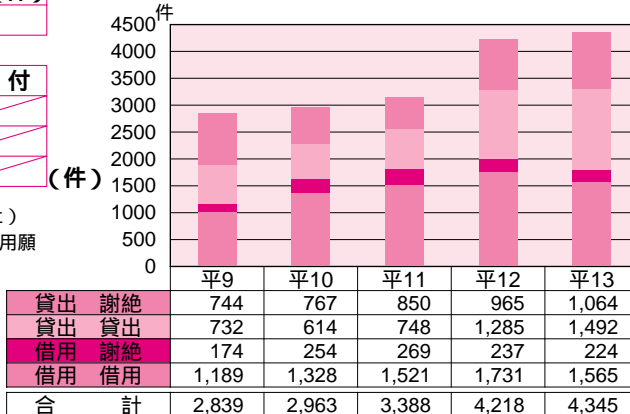
	平成13年度(件)	平成12年度(件)
発行件数	1,010	2,549

内訳:	発行	受付
共通閲覧証	0	
資料利用願	1,010	
特別利用願	0	

共通閲覧証:国立大学間共通閲覧証(平成13年度より廃止)
 特別利用願:国立大学附属図書館間夏季休暇中の特別利用願
 (平成12年度より廃止)

2. 現物貸借

現物貸借5年間推移



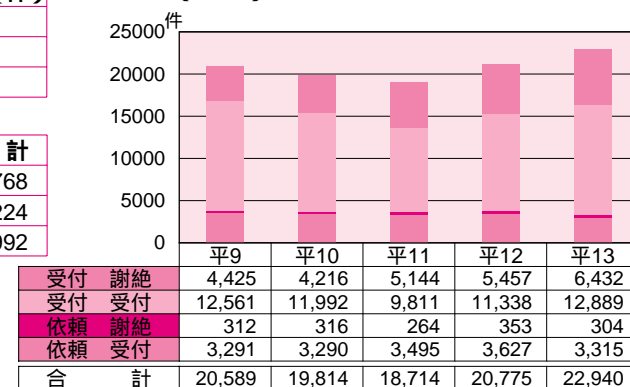
3. 文献複写

	平成13年度(件)	平成12年度(件)
依頼	4,768	5,048
受付	22,224	19,657
合計	26,992	24,705

内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	298	3,619	851	4,768
受付	98	19,321	2,805	22,224
合計	396	22,940	3,656	26,992

文献複写(国内)5年間推移



平成14年度附属図書館公開展示会：学びの世界 中国文化と日本

開催期間：平成14年10月30日(水)～同年12月1日(日) 休館日：毎週月・火曜日

開催時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

会場：京都大学総合博物館 2階 展示室 *学生証、職員証があれば入館料は無料です。必ずご持参ください。

本展示会は、当館所蔵の典籍『幼学指南鈔』が、重要文化財に指定されたのを記念して、「学びの世界 中国文化と日本」というテーマのもとで開催するものです。『幼学指南鈔』をはじめ、中国文化を学ぶための類書や幼学書、中国・日本・韓国の版本、清家文庫、抄物資料、訓点資料など、本学所蔵の貴重な典籍を含め80点ほど一般公開いたします。会期中、記念講演会も計画しております。

第49回国立大学図書館協議会総会の報告

平成14年6月26日、27日の両日、鳥取県立県民文化会館において標記総会が開催された。初日の全体会議では協議会に設置された各委員会等の活動等の報告、今年度の事業計画、文部科学大臣等への要望書等について協議され、了承された。

この結果、今年度の要望書には「学術情報の流通基盤の充実に向けて」のテーマのもとに、学術研究デジタルコンテンツの一層の整備、学術情報ポータル機能の整備、学術図書総合目録データベースの整備、が盛り込まれた。また、今年度の事業として、著作権特別委員会、図書館高度情報化特別委員会、電子ジャーナルタスクフォースを継続し、新規に「国際学術コミュニケーション特別委員会」及び「組織問題検討タスクフォース」が設置されることとなった。なお、本学は昨年度同様、協議会の副会長館及び図書館高度情報化特別委員会の委員長館を務めることとなった。

続いて、第1、第2分科会が合同で行われ、電子ジャーナルの問題、独法化への対応、独法化以後の協議会のあり方、について活発な意見交換が行われた。

二日目は研究集会として図書館職員による、活動事例報告(5件)、平成13年度海外派遣報告(2件)が行われ、本学から、総合人間科学部図書館のパイロットプラン「読書案内」について、活動事例の紹介が行われた。

シネマ・クラシック

幌馬車 (1923年 アメリカ作品 サイレント) 9月5日(木) 第1回上映14:00～15:40 第2回上映15:45～17:25

どこまでもつづく幌馬車の列、途方もないスケールと充実感に圧倒される最大級のサイレント西部劇。アメリカ人の開拓魂を奪い立たせた壮大な叙事詩。(淀川長治)

1924年キネマ旬報ベストテン娯楽的優秀映画第1位

監督：ジェームス・クルーズ 出演：J・ウオーレン・ケリガン ロイス・ウイルソン

市民ケーン (1941年 アメリカ作品) 10月3日(木) 第1回上映14:00～16:00 第2回上映16:05～18:05

25歳のオーソン・ウエルズ監督・主演の伝説的処女作。パンフォーカス技法、カメラの長回しによるワンシーン、ワンカット演出。ストーリーの時間的配列を解体し、主人公の生涯と人物を浮き上がらせる。文学ではジョイス、映画はウエルズといわれるほどの映画話法の変革。(山田宏一)

制作・監督・脚本・主演：オーソン・ウエルズ

アンリエットの巴里祭 (1952年 フランス作品) 11月7日(木) 第1回上映14:00～15:45 第2回上映15:50～17:35

映画史上いちばんお洒落なパリ祭。監督は「望郷」のジュリアン・デュヴィヴィエのめずらしい喜劇。1963年オードリ・ヘップバーン主演の「パリで一緒に」はリメイク。音楽はフランス現代音楽6人組のひとり、巨匠ジョルジュ・オーリック。(三木宮彦)

監督・脚本：ジュリアン・デュヴィヴィエ 出演：ダニー・ロバン ミッシェル・オークレール

会場：附属図書館3階 AVホール

勉学・研究のあいまに音楽を楽しみませんか

「静情」の紙上でも何度か登場している片田文庫のCDをAVホールでかけています。

毎月第2から第5の木曜日、2時からです。

静かなホールで音楽を楽しんでください。出入りは自由です。お好きなときにどうぞ。

図書館の動き

- 5月24日 日本図書館協会総会
- 27日 中国教育部より中国語・中国に関する図書贈呈式
- 6月3日 平成14年度第2回商議会
- 6日 平成14年度近畿地区国公立大学図書館協議会総会（於：神戸商船大学）
- 10日 立命館アジア太平洋大学総合情報センター教官・学生来館（30名）
- 11日 平成14年度第2回全学図書系事務連絡会議
- 17日 鳥取大学附属図書館長来館
- 24日 ソウル中央図書館長来館
- 26日 第49回国立大学図書館協議会総会（～27日、於：鳥取大学）
- 7月3日 平成14年度外国雑誌センター館会議（於：東大）
- 4日 平成14年度第3回電子ジャーナルタスクフォース会議（於：東大）
教育学部学生有志より閉館時間延長について館長に申し入れ
国公私立大学図書館協力委員会（於：中京大学）
- 5日 平成14年度大学図書館職員長期研修（～26日、附属図書館呑海掛員参加）・宇治分館運営委員会
- 8日 大韓民国大―外国語高等学校日本語学科教員・生徒来館（42名）
- 26日 平成14年度第1回選書分担商議員会議・平成14年度第3回商議会
- 30日 平成14年度第4回電子ジャーナルタスクフォース会議（於：東大）
- 31日 平成14年度第1回近畿地区国公立大学図書館協議会講演会
- 8月1日 大韓民国Keimyong大学図書館員来館
佐賀県立佐賀西高等学校教員・生徒来館（42名）

目次

『情報探索入門』2002より	1
朝鮮の印刷文化	6
経済学部所蔵『マルクス『資本論』第1巻初版写真版』について	10
理学部中央図書室紹介	14
片田文庫の音盤資料（CD・LP）	15
利用者の声	16
附属図書館利用統計（平成13年度）	17
平成14年度附属図書館公開展示会：学びの世界 中国文化と日本	19
第49回国立大学図書館協議会総会の報告	19
シネマ・クラシック	19
図書館の動き	20

お詫び

静情第39巻1号の記事に誤りがありましたので、お詫び申し上げます。

巻頭記事の国際日本文化研究センター 森 洋久助教授の紹介が抜けておりました。「平成13年度第1回京都大学附属図書館講演会」にて「歴史地理情報基盤の構築について」という演題で講演をしていただきましたことを追加いたします。

14p 平成14年4月1日付人事異動欄に総務課庶務掛長小西久子とありましたが同人は平成13年4月1日付で就任しており、訂正いたします。

編集後記

今年のこの暑さは異常であると感じます。が昨年と比べてそんなに変わらない温度だそうですね。人間の感覚はあてにならないのでしょうか。

今年からのセメスター制導入によって夏季休暇の期間が変更となりました。9月の末まで休暇ということになります。附属図書館では学業休業中は夜間開館や土・日開館を実施していません。しかし今年は試験的となっていますが、9月の夜間開館（月曜～金曜）を実施することにいたしました。涼しい図書館をご利用ください。この号では久しぶりに「利用者からの声」欄を設けました。皆様からの寄稿もお待ちしております。（C）